

子育て支援として、子育て中の親御さんからのご質問に、専門家がお答えします。

(Q. 1～Q. 4は全て、愛知教育大学 幼児教育講座、林牧子教授(発達臨床心理学)がお答えしています。)

Q. 1

そろそろ何か習い事をさせたいと考えていますが、幼児期に習い事をするのはどのような効果や意味がありますか？

A. 1

我が子に幼いころからたくさんの経験をさせてあげたいという思いは多くの親御さんがもつものだと思います。家庭と園以外にコミュニティをもつことは刺激になりますし、世界を広げるきっかけとなります。また、親御さんがいくら言い聞かせても聞き入れないことでも、習い事の先生から言われると聞くということもあるかもしれません。そのように考えると、核家族化が進む現代において習い事の先生は、子どもの成長に関わる第三者として必要な存在かもしれません。しかし、いずれにしても習い事は本人が楽しく通っていることが大前提だと考えます。習い事に行く前と帰ってからの様子を見ると共に話を聞くことを通して、「この習い事は我が子にとって必要な経験であるかどうか」を判断し、無理強いさせないことが大切なことではないでしょうか。

掲載：令和3年1月

Q. 2

絵本を読ませるといいと聞くのですが、図鑑ばかりに興味を示します。このままでいいのでしょうか？

A. 2

絵本は情操教育にいいと耳にしたことがあるかもしれません。絵本の種類はたくさんありますが、想像することを楽しんだり、友達と仲良くすることや生き物を大切にすることを学んだり、生活習慣を整えたりするきっかけになることもあります。しかし、子どもはもともと「絵本に興味をもつタイプ」と「図鑑に興味をもつタイプ」に分かれると言われています。絵本がつくりだす世界に想いを馳せることが楽しいのか、乗り物や動物などの図鑑を見てリアリズムを楽しみたいのかはそれぞれ違いますし、子どもがどのような楽しみ方をしているのかについて、本当のところは大人には分かりかねると思います。どちらが好ましいかということではありませんので、興味をもって読みたいと思えるものを渡してあげることが最善と考えます。

掲載：令和3年1月

Q. 3

3歳を迎えた我が子のイヤイヤ期が収まる気配がなく、いい加減にしてほしいと頻繁に怒ってしまいます。いずれ無くなると思うのですが、怒ってどうにかなるものなのでしょうか？

A. 3

イヤイヤ期とは親御さんからすればやっかいな時期で、できれば何事もなかったかのように過ぎて欲しいと願うものかもしれません。しかし、人間の脳の発達過程からすると避けることが難しいものなのです。2歳前後の子どもの脳は、嫌悪感を覚える「扁桃体」という部分の発達に比べて、欲求を抑える働きをもつ「前頭前野」という部分は発達途上にあります。そのため、自分の思いが通らなかった時のモヤモヤが怒りとなって出てきた後はそれを抑える機能が働かず、ひたすら「なんだかとにかくあれもこれも納得がいかない！」という状態になるのです。成長とともにこの状態が消滅するのは、前頭前野が発達したことと、自分の思いを言葉で的確に表現できるようになったことが大きなきっかけと考えられます。要するに、脳が発達するのを待つことに尽きます。ただ、頭ごなしに怒ることは気をつけましょう。この時期の子どもの脳は、なぜ怒られたのかという理由を理解できないまま、怒られた際の恐怖のみを感じてしまいます。また、怒ることで一時的にその言動が収まったとしても、欲求を抑える機能の発達は促進しません。イヤイヤが続く我が子とずっと一緒に過ごすことは精神的に疲れることと思いますが、脳の発達と共に収まるので、成長を待ってあげられるといいですね。

掲載：令和3年1月

Q. 4

好きな遊びを中心としているところがいいと思って今の園に通わせていますが、お隣のお子さんは早期教育を取り入れた園に通い、4歳なのにひらがながほとんど書けるし英語も勉強しているようです。小学校は同じ所に行く予定ですが、このままでは最初から差が出るのではと心配です。家で少し勉強させたほうがいいのでしょうか？

A. 4

小学校からの勉強にスムーズに移行できるように「長時間きちんと座ってお話を黙って聞けるようにする」「読み書きはほぼ完成状態にする」など、様々な取り組みをする園もあります。確かに小学校では長時間椅子に座り、やりたくないと思うことでも静かに行わなければならないことが増えるでしょう。それを考えると園でも練習して欲しいと思われるかもしれませんが、勉強ができる子を見ると焦りを覚えるかもしれません。しかし、「長時間きちんと座っている」「黙って話を聞いている」という姿が、好奇心に満ちており様々なものに心が奪われるという幼児期本来の発達に即しているかという疑問が残ります。また、幼児期に九九やひらがなを習得したとしても、小学校以降にそれらを学んだ子どもと最終的な能力に大差はみられません。人間には、歩くことや字を書くことなどを習得するのに最適な時期があります。早期に訓練することによって能力が引き上げられるというわけではありませんし、幼児期にはこの時期にこそ育てるべきことがあります。それは、目には見えにくくて成果としてもはっきりと現れにくい、「やりぬく力」や「遊び込む力」や「自分と他者を信頼する力」などです。自分のやりたいことを見つけて主体的にものごとに取り組む力を育むために、幼児期ではこれらの力を大切にしたいものです。

掲載：令和3年1月